

---

# 宇田川武久先生を送る

—海賊と鉄砲そしてヨーロッパ—

齋藤 努

---

本館研究部情報資料研究系の宇田川武久先生は、2008年3月をもって本館を定年退職される。先生は、本館の構想立案からその実現に至る草創期を支え「七人の侍」ともよばれた設立準備室メンバーの、本館における最後の一人であった。これをもって準備室時代を知る教員は本館にいなくなり、歴博はいわば時代の節目を迎えることとなった。

宇田川先生は、1943年に東京都で生まれ、國學院大學文学部史学科、同大の大学院文学研究科日本史学専攻の修士・博士課程を修了した。この間、戦国大名後北条氏や毛利氏の水軍、瀬戸内海の村上水軍や海賊衆に関する論文を公表し、水軍研究から研究者としてのスタートを切った。

1979年に文化庁文化財保護課に設置された国立歴史民俗博物館（仮称）設立準備室に着任し、1981年の本館設立をもって情報資料研究部助手、翌年には同助教授となった。

1987年には朝鮮王朝と日本との武器交流に関する研究のため、文部省在外研究員として韓国に滞在し、武器関係資料の調査にあたった。宇田川先生の看板となった「銃砲史研究」には、この頃から着手している。現在なお銃砲史研究の画期的成果として高く評価されている著書として『鉄砲伝来』（中央新書）を1990年に、また『東アジア兵器交流史の研究』（吉川弘文館）を1993年に公刊し、後者の著作により1994年には博士（文学）号を國學院大學より授与された。鉄砲伝来から始まった研究はその後、江戸時代初期における技術の受容、さらに江戸時代の砲術諸流派の詳細、そして幕末維新期における外来技術と伝統技術の関係へと広がりを見せ、銃砲史研究としての体系化がはかられていった。

このような研究の進展にあわせ、多くの科学研究費補助金の導入にも実績を残した。すなわち、1992年度の研究成果公開促進費「東アジア兵器交流史の研究」、2001～2003年度の基盤研究(B)「分析化学的手法による前近代金工技術の比較研究」、2004～2005年度の特種領域研究「分析化学的手法による銃砲技術史の相関研究」、2006～2008年度の基盤研究(B)「江戸初期と幕末維新期における銃砲の伝統と革新に関する総合的研究」である。これらの表題からもわかる通り、2000年以降はそれまでの文献史料調査、実資料調査に加えて、分析化学や実射の再現実験など自然科学的な調査手法を取り入れ、銃砲の運用技術や製作技術を含めた総合的理解をめざして研究を展開した。

研究の基礎となる館蔵資料の充実も着実に進められた。本館着任以来の長きにわたり、日本の三大銃砲コレクションとして定評のある吉岡新一銃砲コレクション・安齋實砲術関係資料・所荘吉銃砲コレクション（一部）を蒐集し、現在、本館における銃砲の実物資料と文献史料は、日本最大級を誇っている。これらについては、2007年に出版された『安齋實砲術関係資料及び所荘吉「青圃文庫」コレクション』（国立歴史民俗博物館資料目録）と『武具コレクション』（国立歴史民俗博物館資料図録）にまとめられた。

---

こうした研究と資料蒐集の集大成となったのが、2006年10～11月に本館で開催され、またその後、香川県歴史博物館（2007年4～6月）、和歌山市立博物館（2007年7～8月）、長浜市長浜城歴史博物館（2007年9～11月）においても特別協力館として開催された、企画展示「歴史の中の鉄炮伝来—種子島から戊辰戦争まで—」である。鉄炮の伝来から受容および定着、鉄炮鍛冶職人の技術と社会、幕末維新期の西洋軍事技術の習得など、日本の銃砲の歴史を総合的に展示するものであったが、その中で最もインパクトを与えたのは、鉄炮伝来に関する新説の提示である。これは、従来語られてきた「ポルトガル人が」「種子島に伝え」「たちまち戦に導入された」というストーリーの見直しをはかる大胆なものであった。すなわち、当初鉄炮は贈答品や狩猟の道具として使われ、戦で主要な武器となったのは伝来から十数年経ち、戦国大名が鉄炮衆を創設してからであったこと、種子島に流れ着いた船にポルトガル人は乗っていたが、それは中国船で、指揮をとっていたのは倭寇の大頭目・王直（五峰）であったこと、伝えられた鉄炮も、発火機の構造や銃床の形などからみて、ヨーロッパ製ではなく東南アジア製と考えるのが妥当であること、また、16世紀中ごろのものとして「南蛮筒」とよばれる外国から伝来した鉄炮や、それを真似て日本で作られた「異風筒」とよばれる鉄炮が数多く残されているが、それらの形が千差万別であることから、いろいろな場所に様々な形状の鉄炮がほぼ同時期に伝来したものであり、「種子島」は、実はその中の一例に過ぎないと考えられること、などを、豊富な資料を駆使して実証的に提示したのである。この展示内容は大きな反響をよび、新聞、テレビ、雑誌など多くのマスコミでも報道され、また地域によっては社会的な問題として扱われることさえあった。新しい発見を報道する際の「教科書が書きかえられる」とはマスコミの常套句であるが、これらの説の中で、特に「中国船」については現在すでに、文字通り教科書にも記載されている。先生が唱える斬新な学説に魅力を感じる人は多く、全国各地で行われる講演会に必ず出席する熱烈なファンさえいるほどである。上記の一連の成果は2006年の『真説鉄炮伝来』（平凡社）と『鉄砲伝来の日本史』（吉川弘文館）として出版された。

最後に、宇田川先生が研究の集大成にかかる最も学問的に実りある時期に、科研費や企画展示などで一緒に研究をする幸運に恵まれた私から、一つのエピソードを紹介したい。

2007年12月、銃砲史からみた日本とヨーロッパとの交流についての調査のために、先生とともにオランダとベルギーのいくつかの博物館を訪れた。

宇田川先生の学問は、大学・大学院時代に培われた手法による文献史料の調査に加え、博物館にとって重要な実物資料そのものについての丹念な調査を行い、さらに自然科学的な分析結果をも取り入れて、単なる歴史叙述に留まらぬ実証的な研究を総合的に展開していくもので、とりわけ銃砲史研究の分野では独特の研究スタイルであり、他の追従を許さぬものがある。従って、その衣鉢を継ぐ人材や研究手法全体についての本質を理解する者は、日本においてなかなか得ることができなかった。しかし、オランダとベルギーで出会った研究者たちは、皆まさにこれと同様の研究スタイルをとっており、わずかに会話を交わすだけで、彼らは、先生が自分たちと同種の研究者であり、また日本における銃砲史研究の第一人者というにふさわしい学識と経験とを有していることを感じとり、行く先々で、単なる儀礼の域を超えた敬意溢れる丁寧な対応をしてくれた。資料とその歴史的背景に精通した専門家同士として、言葉の壁を超え、時には通訳を介さずとも学問上の議論—それもかなり高度な内容のやりとり—が成立しているのを目の当たりにすることができたのは、私

---

にとって、驚異的でかつ貴重な体験であった。特に、著書『真説鉄炮伝来』の出版をきっかけに知り合い、本館に外国人研究員として滞在し、またこのヨーロッパ調査のコーディネーターを務めてくれた、幕末維新期の日蘭交流などの視点から銃砲研究を進めているオランダの Royal Home for Retired Military Personnel and Museum 館長・Pauljac Verhoeven 氏は宇田川先生と深い学問的・人間的交流を行い、同氏は「自分は宇田川先生の一番弟子である」と宣言した。

宇田川先生は、日本ではついにかなわなかった、自分の研究の真の理解者と弟子とを、定年退職の直前によくヨーロッパで得ることができたのである。

(国立歴史民俗博物館研究部情報資料研究系)